

台湾総督府美術展開催期（1938-1943）における陳敬輝の制作態度

洪韶圻（京都市立芸術大学）

1939 年前後、中村敬輝と改名した台湾画家の陳敬輝（1911-1968）の台湾総督府美術展覧会の出品作品を見渡してみると、武道、兵士、銃後の女性労働者といった画題が多く、積極的に時局色を表現しているように見える。従来の研究では、小学校から日本に留学し、京都市立美術工芸学校、京都市立絵画専門学校で日本画を学んで、日本人の妻を娶ったといった経歴により、彼のアイデンティティーは日本に傾斜していたとされ、それゆえに彼の作品も「戦争画」または「聖戦美術に類するもの」であると指摘されてきた。だが、前述の論点によると、陳敬輝は同化の成功例として当局に重視されるはずであるものの、同時代の美術評論ではそのような指摘はほとんどなされておらず、その上、言及されても画家の安易な制作態度がしばしば批評を受けている。このように、戦前の批判と戦後の評価は対照的であり、画家の制作実態を明らかにすることが必要となる。

そのため、本発表ではまず、陳敬輝の勤務先であった淡水中学校・同高等女学校がミッション・スクールから官立中等学校へと再編される前、つまり 1934 年から起こる総督府や軍部による排撃運動に注目する。それによって官立中等学校の図画教員並びに官設美術展の中堅作家であった陳敬輝が積極的に時局色を考えて制作しなければならなかった理由を明確にする。

次に、排撃運動が展開された時期は、北部教会における新人運動という形式で教会の革新が模索されていたさなかであり、「こうした動きは、林猷堂を中心とした自治運動の圧殺とも連動していたと見ることができる」という駒込武の指摘がある。1934 年 11 月に台湾「西洋画家」の中堅層が台陽美術協会を成立した直後、1927 年より開催されてきた台湾美術展覧会の「改革」が叫ばれはじめ、台湾総督府文教局に移管され官設美術展へ移行したことも、その動きのひとつと捉えられる。特に、作家の自治や発言権に対する理想追求のため、台陽美術協会が積極的に文教局長に交渉したが不調におわり、のち妥協的に理想を保つ策略に転じた経緯が注目される。

最後に、陳敬輝の職業も画業も、いずれの役職も文教局の管理下にあったことに加え、彼はスパイと疑われるキリスト教徒であり、宣教師のマッカーイの外孫でもあることを考えれば、その一挙一動は当局に監視・警戒されることは明確であった。そうした状況の中、陳敬輝が制作において能動性を発揮できる余地はわずかであったが、彼が 1940 年に「東洋画部」の増設により台陽美術協会に加入した事実を考えれば、彼の主体性は台陽美術協会会員たちと同様に、自治や発言権に対する希求にあったと推察される。

総じて言えば、陳敬輝の制作態度は「蛇のように賢く、鳩のように素直に」表面的な画題にとどまったのであり、本質的な「戦争画」または「聖戦美術に類する」作品とは異なり、台湾人としての主体性をそこに見出すことができるのである。